

治癒の魔法が使えるサキュバスがプリキュアの世界に転生した件

シャリル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サキュバスなのに、治癒魔法が使える、サキュバスとしては半人前として嘲笑われ、その悲しみを持ったまま、その生涯を終えたある一人のサキュバス。

しかし、気づけば人間の世界に転生してて、しかも魔族と戦う伝説のプリキユアとやらに選ばれて!?

注意!!!

サキュバスと書いてありますが、性描写は一切しません。ですが、一応の為、R15に設定しておきます。

目次

プロローグ

私はずっと一人だった。

同じ種族の人達に「半人前」と嘲笑われ、母親と言われる者からも近寄るなど言われた。

何故、私は皆から遠いんだろう？

治癒の力を持つ私は変なの？

誰も教えてくれない日々を過ごし、私は寿命を迎えた。

けど、私は死ぬ寸前に願った。

生まれ変わったら、次は一人じゃないといいな。

静かに風が吹き、草が靡く風景を夕焼けと共に見る少女。
彼女は自分の長い黒髪を風に靡かせ、風を感じる。

少女の名前は篠原しのはら榎。

前世は治癒の力を持つ、半人前のサキユバス。

彼女の願いは叶えられ、槇は現在愛情溢れる家族に育てられ、友達もそこそこ出来ていた。

しかし、前世の時の癖か、こうやってたまに一人になりたくて、この場所に来る。

この場所は槇以外誰も知らない。

何故なら、この場所に来るには何も舗装されていない獣道を歩かなければならないからだ。

槇は深く息を吸い込み、ゆっくりと息を吐いた。

そして、ここから見える槇が住む町、杉夕町を見つめた。

私が、この世界に来てもう15年。しかも、来週からは高校生。

前世では絶対掴み取れなかったこの日常。

とても幸せで、けど、これは幻ではと、時々疑いたくなる。

けれど、これは現実。

私はここで人間として生き、人と生きていく。

「……もうそろそろ、家に帰らないとな……。風も強くなってることだし。」

誰も居ないのはわかっているのは知っているのに、小さく独り言を呟き、立った。

キラッ

「ん？……なにか今光ったような……。よつと。」

一瞬だけ光ったその存在が気になり、地面を見る。

それは、すぐに見つかった。

「これは……コイン？人の絵と……。何か書いてある……読めない。」

槇はそれをじつと見つめるも、風がもつと強くなっているのに気づき、コインをポケットにしまい、家に帰った。

しかし、槇は気づいていなかった。

その光景を、見ていた二つの影を。

「ただいま。うきさぶいく。」

「そんなかつこで外にいるからでしょう。ほら、ちゃんと上着なさい。風邪ひくわよ。」

母にパーカーをもらい、それを着ながら、ストーブの前で手をあてる。

そこで、ついさつき拾ったコインをポケットの中から取り出した。

「あら？ 槓、何持つてるの？」

「ん？ これ？ 散歩中に拾った。」

興味津々に覗く母に見えやすいよう、母の近くにコインを近づける。

しかし、母は老眼であるが為に目を細め、じつと見た。

「この絵は……北欧神話に出てくるオーディンじゃない？ 裏にもそう書いてあるし。」

「え!?!」

何故読めると思いつつ、コインの裏側、文字の書いてある方を見るも、やはり分からない。

「と、言ってもラテン語だけどね。」

「…ソウデスカ。」

ため息をつきつつ、そのコインをポケットにしまった。

……なーんか、嫌な予感しかないな…